



2018年へのひと言
恩師の方々へ感謝をこめて

「退路を断って飛び込め」 その檄が、 自分の迷いを消してくれた

佐々木重人 専修大学長

うも内容がわからない。澤田先生にお尋ねすると「じゃあ図書館に行って調べましょうか」と(笑)。先生と友人、私の3人で図書館へ行き、いろんな本をめくって答えを探しました。図書館へ移動して調べものをするだけで30~40分はすぐ経ちますから、さてこれから研究室に戻って……とはならず、先生が「じゃあコーヒーでも飲みますか」と。友人の車で東名川崎インター近くの喫茶店までドライブし、コーヒーを飲んでましたね(笑)。とても牧歌的な大学院の授業だったなあ、と懐かしく思います。

先生が翌年定年となり、修士の2年目にお世話になったのが小澤康人先生でした。この先生は1年間アメリカのイリノイ大学で研究をして、帰国してらっしゃいました。小澤先生も勘定学説に詳しい先生で、ずっとお世話になりました。

2年になった私は、博士後期課程に進むため入学試験を受けること、修士論文を書くこと、また博士に行くなら何を目的にすべきか——など、プレッシャーを感じる事があって、いささか不安になった時期でもありました。その時に小澤先生が僕を見て、「退路を断って飛び込んでいかなければだめだ」という激励をくださったのです。周りの友人が会計士などを目指し、私自身も揺れるなかで、それ

者としての道を示してくださいました。非常に姿勢の良い先生で、入学時から憧れの印象を持っていました。4年になって大学の研究職に就くべきか、迷った時に相談しました。まず、大学院への進学ありきということを教えていただきましたが、その時「最終的に何になりたいのか」と問われました。私は会計学科でしたから職業会計人などの選択肢があるなかで、「学究目的です」とハッキリ言葉にしてお答えしました。それまでは自分でもあやふやでしたが、言葉にしたことで自分の方向性が定まり、決意して前に進むきっかけとなったと思います。

大学院へ進むと、檜田先生は他大学へ移籍され、院での指導教授は澤田武先生になりました。澤田先生は本学の校友でもあり、商学部長も経験された専修大学の重鎮です。定年まで1年を残す時期、「勘定学説」という理論研究について学ばせていただきました。先生は学問に対して気さくな考えをお持ちで、ある時、古典の会計の本を読んでおり、ど

多くの先生方と出会い “学究への道”が確たるものとなる

新年、あけましておめでとうございます。昨年は専修大学の大学改革に向けての準備が前進した年でした。全教職員がそれぞれの職場、検討委員会やワーキンググループといったところで改革に携わる一つひとつのパーツを真剣に議論していただき、なんとか大きな枠組みが出来上がりました。年頭にあたり、努力いただいた皆様方に深く感謝を申し上げます。今年はその成果が形となり、表に現れてくる年となるかと思えます。ご期待いただけましたら幸いです。

今号のテーマを受けて、いまの自分に至る過去を振り返ると、まず大学の教員になる時に影響を与えてくださった方々の顔がすぐに浮かびました。一言でいえば、非常に多くの方に導いていただきました。

大学4年の夏休み、進路をどうしようかと思案していた時、ゼミナールの指導をしていただいた檜田信男先生が研究

を聞いて「頑張ればなんとかなる、行けるところまで行こう!」と研究職を志したのです。小澤先生は、「自分で決めたことは初志貫徹しなさい」ということをおっしゃりたかったのではないのでしょうか。

博士課程修了後、商学部で小澤先生の助手となりました。小澤先生から「研究分野の資料を集めて来い」と、先生のかつての留学先であるイリノイ大学へ行き、同大学のジンマーマン先生を紹介していただきました。84年のことです。ジンマーマン先生は同大で国際会計分野の研究にも携わり、歴史に関心のある先生です。彼の博士論文は歴史研究でした。ジンマーマン先生の話聞く機会を得て、日本の会計の発展というものが実は近代のイギリスやアメリカからの影響を強く受けているのだ、ということを知ってもらい、ジンマーマン先生の博士論文を翻訳したらどうかと、先生の論文を図書館で見つけて、翻訳に乗り出しました。時が経ち、90年に在外研究で再び同大を訪れた時、一気に翻訳しようとなり、その1年で翻訳したのです。わからないことがあれば、そばにジンマーマン先生がいますので、すぐに尋ねることができました。原著者がそばにいるというのは翻訳する私にとって、これ以上ない環境でしたね。

多くの先生方との出会いがあって、みなさんにひっぱっていただいたと思います。もしこうした出会いを得られなければ、会計の専門職を選んでいたのではないのでしょうか。

新学部、新校舎について広報へ注力 校友が参加できるしくみづくりを推進

本年より、新学部については、学科のプログラム内容を高校生、およびご父兄に説明し、本学入学につなげていくための施策を考える必要があります。同時に国際系新学部についてもプログラムのカ



思い出深いジンマーマン先生の博士論文と、それを佐々木学長が翻訳した『近代アメリカ会計発達史』

リキュラムなどを固め、商学部についても神田への移転を見据えてアピールしていく必要があると思います。

また、今年は神田の新校舎がよいよ着工する年となります。校舎が新しく建つこととかけあわせて、新たな専修大学のイメージを打ち出せないかと考えています。具体的には校友の方も含めた参加型の建築につなげることができるのではないかと思います。たとえば寄付金も、高額ということではなく、寄付をしやすいくみをつくっています。「チェア募金」という名前で校友の方に周知していますが、チェア(椅子)というのはひとつの象徴で、新校舎のさまざまな備品について寄付をお願いできませんか、というお話をしています。このような学校と校友との距離を縮めるような寄付のあり方で、参加型の新校舎新築を目指す所存です。これにより、誰もが出来上がりの過程を楽しみにできることを想定しています。寄付による参加意識を持っていただくことで、出来上がった暁には「ぜひ見に行ってみよう」というお気持ちを持って

ただけましたら良いと思います。学生時代の新鮮な気持ちをもう一度思い起こしていただけたら幸いです。

新校舎については、高校生や親御さん、神田近辺にお勤めの方などにしっかり広報活動をしていきたいと考えています。これは出来上がるまではもちろん、完成以降も必要だと思っています。

校友会の活動に感謝 大学と校友の連携で前進を

大学の改革がよいよ間近となりました。大学・校友会・法人とで連携を取り合い、しっかり進めていきたいと思えます。校友会のかたがたには小宮会長はじめ、みなさんが精力的な寄付金集めなど、大きくご尽力をいただき、深く感謝しております。募金やご寄付を「大学との距離を縮める手段」と言っていただけののも心強い点です。校友会をはじめ、校友の皆さま方と手を取り合って改革を進めていく所存です。

(2017年10月25日 神田校舎にて)